

～防除室だより vol. 49～

病害虫防除室
2020年6月1日

ツマジロクサヨトウ

ツマジロクサヨトウは中南米原産で、2016年にアフリカに侵入した後、急速に東方へ生息域を拡大した。2018年までにアフリカ中南部のほぼ全域に分布が拡大し、2018年にインド、2019年1月に中国雲南省、6月には韓国・台湾でも発生が確認された。

日本国内では、2019年7月3日に鹿児島県の飼料用トウモロコシで初確認された。その後、11月末までに九州全県、中四国地方、茨城、福島、青森県など21府県の現地ほ場で発生が確認された。また、島根県などではフェロモントラップにおいて雄成虫が誘殺された。

本年も5月中旬までに九州4県で飼料用トウモロコシで初確認されている。

1. 形態

成虫は開張約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、雄のみ前翅中央部に黄色い斜めの斑紋を持つ。

終齢幼虫は体長約40mmで頭部の複眼と前額の境界に淡色の逆Y字状の模様及び尾部の黒色斑点が特徴である。

卵は、寄主植物に塊状に産み付けられ、雌の体毛で覆われる。



成虫(農林水産省資料より引用)



幼虫(農林水産省資料より引用)

2. 生態及び被害

南北アメリカ大陸の熱帯から亜熱帯を原産とする南方系の害虫で、暖地に適応する。熱帯地方では年4～6世代発生し、熱帯以外では1～2世代になる。

本種は休眠せず、低温になると活動や発育を停止する。アメリカでは、冬期にフロリダ南部以外の地域で生存できないとの報告がある。

寄主植物は、文献によるとトウモロコシやイネなどのイネ科植物のほか、アブラナ科、ナス科、ウリ科、キク科、ナデシコ科、ヒルガオ科、マメ科など幅広い作物を加害するといわれている。

これまでのところ国内では、飼料用トウモロコシ、スイートコーン、ソルガム、サトウキビなどで発生が確認されている。

被害は、幼虫が葉、茎、花及び果実を食害する。若齢幼虫は葉を裏側から集団で加害し、成長すると加害しながら分散する。若くて柔らかい部位を好んで食害し、加害部には多量の糞が散在する。



幼虫による食害(農林水産省資料より引用)

3. 防除対策

県内では、6月からフェロモントラップを設置するとともに、各地で生産ほ場調査での調査を行うこととしている。

生育初期に幼虫の食害を受けた場合、被害が大きくなると考えられるため、ほ場をよく見回り早期発見に努めることが重要で、本種と疑われる幼虫を発見した場合には、速やかに病害虫防除室に連絡する。

本種による加害が確認された場合、農薬散布が可能なほ場では、ツマジロクサヨトウに対する農薬登録はないが、植物防疫法第29条第1項の規定に基づく措置として、県は農林水産省が示している農薬リスト(注)の散布指導を行うこととなる。

(注) 農林水産省「ツマジロクサヨトウの薬剤防除に使用できる農薬一覧」

http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/attach/pdf/tumajiro-32.pdf